

子どもの今を感じる先生に向けて

「学ぶ側の論理からの問い直し～学校に生徒の『やりたいこと』はあるのか～」を教育課題に掲げ、授業改善を行っています。特に今年度は、授業改善を図る中で、先生たちが日々感じている指導の悩みや戸惑いをもとに、「子どもの今」をどう感じ、理解し、学びに生かすかを研究の中心に据えました。

【岩川直樹先生からの助言①教師の居方】

- ・“枠”や従来の価値観を突破し、子どもの思いに応えること
- ・教師は、子どもの目の前の「今」だけではなく、背景や経緯を理解し、伴走者としてかかわること
- ・あと30cm、その子に関心を向けようとする、その子にできることが見えてくる、その子の思いに応えたい
- ・教師同士が子どものことや自分の思いを語り合う時間が、学校の土台になる

まず、子どもの今を感じとるために、先生自身がこれまでの子ども観や指導観を問い返し、子どものことを先生同士で語り合う（分かち合う）ことを実践しようと考えました。

「子どもの姿を語ろうサロン」と称し、担任が挙げた「深く理解したい生徒」を中心に授業を参観し、その子たちの様子を語り合いました。発問や板書など授業の手法だけではなく、その子がどんな思いで授業に参加していたのか、どんな背景があるのか等々、学年や教科、経験などの枠を越え、正解を求めずに語り合いました。

【岩川直樹先生からの助言②子どもの今を学びに生かす】

- ・子どもを変えるのではなく、子どもに応えるために学校や教師自身が変わること
- ・生徒の「now-growing」に応え、教師も共に変化するプロセスが重要であること
- ・その子の特性を活かせる場、普段活動できない生徒が参加できる場を工夫し、「子どもで授業を行う」のではなく、「子どもと共に授業を行う」こと

岩川先生の助言から、先生たちで生徒の生活背景や思いを共有し、その子の今を感じながら、その子がワクワクする活動を考え、実践を始めました。当日は、生徒の思いを共有した先生と生徒とがかわりながら授業（総合的な学習の時間）をつくっていく予定です。授業後は、参観された先生たちも一緒に「子どもの姿を語ろうサロン」に参加していただき、生徒の姿から生徒の思いを分かち合いたいと思います。



共同研究者 岩川先生から

「一人の子どもを育てるには一つの村がいる」。アフリカのこの諺は人間の教育の本質を私に呼び覚ましてくれる。赤ちゃんを抱きかかえたまま育てるチンパンジーの子育ては母親のワンオペだが、いろんな人たちと顔を見合わせることでできる人間の子ども教育はコミュニティで担うものなのだ。多くの子どもたちを一人の担任が受け持つ学校教育は、それとは真逆の状況になる矛盾を抱えている。それぞれの教師が孤立すれば、その重圧はなおさらだ。松代中学校の試みは、学校が抱えるその矛盾と向かい合う。一人ひとりの子どもを教育するには一つの学校がいる。一人ひとりの子どもと向かい合うことで、学校は一つのコミュニティになれる。その試みをもつ深い意味を分かちあってゆきたい。



～日程～

- | | |
|---------|------------------|
| ① 受付 | 12:45～13:00 |
| ② 開会行事 | 13:05～13:15 |
| ③ 研究発表 | 13:15～13:30 |
| ④ 授業参観 | 13:40～14:30 |
| | 2年1組 授業者 涌井孝治 教諭 |
| ⑤ 分かち合い | 14:40～16:25 |
| ⑥ 閉会行事 | 16:30～16:40 |